

書道の手本観察における熟練者と非熟練者の注視行動の比較

福島 芽美

書道において、「臨書」を行うことが技術の習得に効果的だと言われる(大池, 2008)。臨書とは、手本となるものを模倣して書くことである。この場合の手本は主に中国や日本で古くから伝わる古典を指す。忠実な模倣には古典の特徴を詳細に把握することが必要だが、物事の観察において知識や経験がある熟練者とそうでない非熟練者では注視行動が異なると考えられる。そこで本研究では書道の臨書の手本観察における熟練者と非熟練者の注視行動を比較し、その特徴を明らかにすることを目的とした。

実験参加者は画面に呈示される 2 文字の手本を自由に観察し、その後手本を見ながら実際に半紙に書字した。観察する文字刺激としては 5 つの手本を用いた。手本観察中はアイトラッカーを使用し、参加者の眼球運動を計測した。得られたデータから観察時間、各 Area of Interest(AOI)の合計注視時間、合計注視回数、注視の移動回数、平均注視時間、サッケード振幅を算出し分析を行った結果、熟練者と非熟練者で次のような共通点や相違点が見られた。

まず、すべての手本刺激に対して熟練者と非熟練者の間に平均注視時間の差が見られなかった。このことから、熟練者・非熟練者ともに手本観察において特徴を掴もうとする姿勢が共通していた可能性が示された。また、熟練者・非熟練者ともに文字間の注視の移動が少なかった。このことは、2 文字という手本の特性上あまり上下を見比べる必要が生じなかった可能性を示唆する。

観察時間においては非熟練者より熟練者の方が長い傾向が見られた。この結果と内観報告から、熟練者は非熟練者よりも観察を行いながら実際に書くイメージを念入りに行っていた可能性が示された。

また、各 AOI の合計注視時間、合計注視回数において熟練者と非熟練者で異なる傾向が見られた。非熟練者は見慣れない特徴のある点画(特に線が細い箇所)に注視が引きつけられ、そこに対して注視が偏った可能性が示唆された。一方、熟練者はほとんどすべての点画に注意を払ったうえで、筆遣いが特徴的な箇所(特に始筆、終筆)や、文字や点画の位置関係を把握するのに重要と思われる箇所に注視が集中する傾向が見られた。これは、熟練者においては書道の技能が自動化され、筆の扱いや運筆などの基本的技術には意識を向けなくても遂行することができ、その分重要と思われる他の箇所に専念することができた可能性を示唆する。また、その重要な箇所というのは熟練者がそれまでの経験で様々な古典に触れてきたことで、臨書において有用であると考えられる箇所を手続き的に記憶してきた可能性が考えられる。

内観報告においては非熟練者よりも熟練者の方が報告量が多く、ほとんどすべての点画について言及する傾向が見られた。つまり、熟練者は臨書を行う上で手本のすべての特徴を掴み、それを忠実に再現しようとする姿勢を身につけていると考えられる。本実験で参加者は半紙に書字したが、臨書は大きな紙に行くことが多く、一度に多くのことを考えながら書き進める必要がある。そうした経験のある熟練者は手本観察においても様々なことを考えながら進めることができたのかもしれない。また、実際に古典名を出して報告を行った熟練者もいたが、古典に関する多くの知識を容易に検索できる形で保持しているため、手本刺激の特徴から古典を思い出すことができたのかもしれない。

一方、内観報告からは説明できない注視行動の違いも見られた。例えば、刺激「皇帝」における熟練者の注視の偏りや、「忠臣」において非熟練者では「忠」の左上、熟練者では右上に注視が集まる傾向が見られた。これらの注視行動がどのような要因によって生じたのかは今後検討する必要があると考えられる。
(応用認知心理学)